

# 友の会だより

孀恋郷土資料館

2011年9月23日

No 10

楽しく優雅に開催

## 十五夜 お月見の会

今年で15回を数える 孀恋郷土資料館および同「友の会」主催の「十五夜 お月見の会」が9月12日午後7時から郷土資料館3階の展望室で開催されました。これには、村から熊川浩教育長、郷土資料館の松島榮治名誉館長らが出席したのをはじめ、村内各地から多くの人が集い、優雅な雰囲気の中、和やかで楽しいひとときを過ごしました。



この日、資料館の2階では、文化協会などで茶・華道の講師を務める桑原ふみ子さんをはじめ、そのお弟子さんたちが池坊流の見事な生け花を生けて来館者を迎えました。正面玄関の受付には、友の会の伊藤千鶴子さんと田中美代子さんがコスモス、ツルウメモドキ、ススキなどの秋の花々を豪華に生けられ、十五夜の観月の雰囲気を大きく盛り上げていました。

お月見の会は、はじめに滝澤仲二館長が開会の言葉を述べ、友の会の土屋澄孝会長、松島名誉館長、熊川教育長が順番にあいさつ。このうち松島名誉館長は、平成9年から行われるようになった「お月見の会」の経緯に触れながら、郷土資料館は“教育・文化の場”であると強調。これからも村民の皆さんに愛され、活用していただけるよう、さらなる発展、成長を期していきたいと述べました。



このあと「十五夜の茶会」が開かれ、はじめに桑原ふみ子さんが、抹茶のいただき方、茶菓子の召し上がり方など茶の湯の作法を解説。参加者は、実際にお弟子さんたちから茶菓子や茶を振舞われ、「抹茶って、こんなに美味しかったですね！」と感嘆の声をあげるなど、深い茶の味わいや風雅な雰囲気を堪能していました。

昔語り「十五夜の思い出」では、三原の唐澤富子さんが、養蚕農家に生まれ育った体験から、十五夜が来ると、周辺の野に自生するススキや草花など自然の美を愛で、親子してお月見団子をつくったことなどが懐かしく思い出されると述べ、この日は、孀恋の豊かな自然に感謝し、家族の絆の大切さを再確認する原点の日になっている旨の話をしてくれました。



つづいて松島名誉館長が「月に寄せる古人の心」と題して講話を行いました。はじめに今井地区の東平遺跡から出土した「深鉢形土器」を披露し、その口縁部に蛇の頭、その下部に目と思われるものが表現されていることを指摘。中国の「四神思想」は日本に伝わり、天の四方を司る、

いわゆる青竜、白虎、朱雀、玄武（蛇）を配した壁画は、あの奈良・高松塚古墳で確認されており、群馬・前橋の前二子古墳からも「四神付飾土器」が出土していることを紹介。

さらに中国の「月宮殿」伝説に触れ、古代の人は月の都にはカエルが棲み、そのカエルが月をかじることによって満ち欠けが生じると信じられてきた。また世界中の大雨や洪水はカエルが引き起こしているとも言及。前二子古墳の「四神付飾土器」には、玄武（蛇）に怯えるカエルが表現されており、各地でそのような土器が出土しているのは、つまり世の中の災いを招くカエルを押さえられるのは蛇であるとの伝説からであろうと述べました。



田代の干川伸之さんのご家族によるギターとアイルランド楽器の演奏が行われました。ここでは、「もののけ姫」、「千の風になって」をはじめ、秋の曲のメドレーなどが奏でられ、その美しい見事なハーモニーは聞く人たちの間に大きな感動を呼んでいました。最後は参加者全員が藺田カネ子さんの指揮で「里の秋」「故里」「赤とんぼ」など、秋にまつわる童謡を歌い、また来年の「お月見の会」に元気で集い合うことを誓い合っていました。

（写真・記事＝ガンビ―）

## ～～ もっと知りたい天明三年のはなし ～～

### 浅間山大噴火の爪痕…… 関俊明氏

郷土資料館の本年度講座のうち、関俊明氏による「もっと知りたい天明3年のはなし」——「浅間山大噴火の爪痕」（後半）が9月17日午後1時半から、資料館3階で行われた。これは、「浅間山大噴火の爪痕」（前半）として6月に実施された天明3年の“浅間山焼泥押”に埋まった上福島中町遺跡（玉村町）発掘現場などの現地見学会に続くもの。



講座で関氏は、大要次のように語った。「泥流を被ったり、降灰に埋もれたりした浅間山下方の田畑を検証すると、農民たちは飽くことなく軽石や火山灰に覆われた畝に土寄せを繰り返し、そこに作物を植えつけるなどコツコツと農作業を続けていたことが分かる」と紹介。また特に畑の中で発見したイモらしき作物の塊茎穴の石膏型に話が及ぶと、「解析に力を注いだ結果、作物は成長途中のサトイモであったことがわかり、しかも、それらは甚だ生育不良であったことが判明、その他作物の不作などと考え合わせれば、浅間噴火以降も数年間にわたって続いた天明の大飢饉を予兆させるものであった」と解説を加えた。

このあと、「もうひとつの1783年」として、同じころ世界各地で起きた火山噴火の例を紹介。「アイスランドのラキ火山は、浅間山のそれよりはるかに大きなものであったと述べ、伊豆諸島の青ヶ島（丸山）でも、噴火によって島民が八丈島に避難し、その50年後に「還住」を果たしたドラマは後々まで語り伝えられている」と指摘。「今回の東日本大震災の例からも、こうした災害を私たちは忘れないようにし、未来永劫風化させないために、語り部となって後世に語り継いでゆくことが大切です」と訴えた。

（写真・記事＝ガンビ―）